

中 国

戦中を機関車と共に

岩手県 中 村 祐太郎

私は、昭和十六年一月、満州で三年間の兵役を終えて帰ってきた。

十月になって、関東州の警察官採用試験に合格はした。その頃、原隊の人事係准尉から手紙が届き、満鉄へ就職したいなら機関士心得として採用されることになっている、と。だが採用されると北満行きになるだろう。在隊中冬の衛兵勤務のとき、零下四十度を経験したが、骨のずいまで凍るようなあのときの寒さを思い出し、ちゅうちょとしているところへ、天津から息子の遺骨を

抱いて帰ってきた父の友人の奥さんと会う機会を得た。その奥さんはこう言った。警察官は人に嫌われるし、北満は寒いし、天津へいきませんか、面倒を見てあげますよ、と。私の腹はきまった。天津へ行くことを告げ。渡支の準備にとりかかった。その最中、日本軍は米英蘭と戦争の火ぶたを切った。私は十二月末に朝鮮満州をへて天津へ向かうことになった。

関釜連絡船は、豪華船だった。四年前、入隊のため大連へ向かったときの輸送船に比べれば、馬車に対する高級乗用車のような違いであった。夕食をすまし、入浴してベッドにもぐって気がつく、朝には釜山に着いていた。

列車は鴨緑江の鉄橋を走る。税関吏がきて、朝鮮婦人の大きな荷物を取り上げるや、ばりばりと破いてしまっ

た。その瞬間、中から毛皮がどつとながれるように出てきた。税関吏は、その毛皮と婦人を引きずって、隣の車両へ消えて行った。

税関吏は日本人のようで、毛皮は密輸品のようであった。列車は安東へ着いた。白の朝鮮、黒の満州というが、鴨緑江を越えただけで、服装はすっかり変わり、中国人は黒一色の袖も長い服を着て悠々と歩いている。

この列車は、興亜と言った。釜山から北京まで、三國直通の国際列車である。列車は山また山を分けるように走り、思い出多い橋頭、奉天をへて、中国の東北の玄関山海関へ着いた。当時日本円は、朝鮮、満州で使用可能、朝鮮円を満州でも使用可能、満州円は満州で使用となっていた。しかし、中国では、日、朝、満の円は使用できず、ここの税関で兌換せねばならなかった。山海関は五千五百キロの長城の始点であり、その築城は渤海の中から始まっていた。天津機関区へ挨拶に行った。係は、南満互房店で勉強したのなら、万家嶺の勾配を乗務したでしょう、と問う。私ははいと答えるとさっそく乗務してもらいましょうと。社服と作業服を与えられ、最初は豊

台行への貨物列車の機関助手として、中国人の機関士と助手の組合せであった。満鉄はほとんど自動焚火機だが、ここ華北交通は全部手焚きで貨物列車は夜間運転が多く、苦勞苦勞の毎日であった。しかし自ら求めてきた道だ、日本の国策の前線で活躍しているのだと自分を励ましつつ頑張った。

私は中国語を知らず、同乗の中国人は日本語を知らず、危険な夜間の乗務がぶじにできたのは、彼等の私への親切な指導のお陰であったと思っている。その後旅客列車に乗務し、北京、山海関、徳県方面へと多忙な毎日であった。準職員試験に合格し、北京の鉄道学院機関車科に学び、機関士となった。

昭和十九年頃から謀略による脱線事故が多くなり、米軍機の機関車銃撃が頻度を増し、被弾による死傷者が出るようになった。二十年初夏、華北南部戦線へ救援に行く。昼間運転は米国機の標的となるので、夜間運転となる。前照灯なしの暗夜の運転は無気味であった。任務を交替し、天津へ帰って一か月後に終戦となった。しかし平和にはならなかった。昨日まで協力して日本軍と戦っ

た国民、共産兩軍は、翌日から撃ち合いとなり、天津郊外には銃声が聞こえるようになった。一部の日本軍は、再武装を命ぜられ、装甲列車を急造し、再び戦線へ、私はその機関士として出勤、しかしさいわいに戦禍はなく、ぶじ解散されて帰ってきた。

八月末の国民軍の入城、九月末の米軍の入城、皇軍の姿はなく、米国大型戦車の堂々の入城式には、中国民衆は万歳を叫んで欣喜雀躍。その民衆に混って、その隙間から小さくなって行進を眺める敗戦のまじめさをしみじみと味わった。その頃から、奥地から日本人が、貨車で、徒歩で天津へ集まってきた。それ等を貨車に乗せて、かつて北支軍の供給基地貨物廠へ送る。米軍兵士が機関車へ上がってきて、走れ、走れとせめるが、機関車は弱ってしまつて蒸気があがらず、なかなか走らない。

私達十人ほどが残留を申しこんで許され、日僑の腕章を腕に巻いて、戦後復興に協力することになったが、翌年六月、留用解除となり、妻と子を連れ、米軍の上陸用船艇で日本へ帰った。佐世保から車窓に映るものは焼けの原ばかりであった。

中国青少年の育成に夢

神奈川県 戸上 恭二

明治四十一年二月、大牟田市の土木建築業幾次郎の次男として出生、旧制中学校卒業後、父の建築業の手伝いなどし簿記、設計見習いしながら、音楽やスポーツ等練習にはげんだ。

大正、昭和初期、全国的不況時代にはいり、当時、南満州鉄道経営の安東小学校教師、義兄許斐卯一宅に寄居、そのすずめで同校の音楽助手をつとめ、夜間は青年学校支那語科で学習にはげみ、周囲の協力下、朝鮮の教員免許に合格、鉄嶺小学校等の助教員の道を進み、結婚して満鉄経営の鞍山公学校教師になり、中国青少年社員教育に専念、終戦まで十年間全力投球、中国青少年の育成の道を進む。

昭和初期、満州は地方軍閥の压制下で、在住日本居留民の圧迫された日常生活の不安は強く、柳條溝事変から